

# 社会主義のみが 中国を救う

許徳珩



中華人民共和国成立三十周年にあたり、本誌は  
知名人数氏に感想を寄せていただいた。つぎの文  
章はその第一編である。

編集部



中国人民の反帝・反封建の闘争は  
連綿として続いたが、プロレタリア  
政党的指導がなく、社会主義の方向  
がなかったため、いつも真の勝利を  
かちとることができなかった。ロシ  
ア十月革命が起こってからやっと、  
中国革命の偉大な先駆者李大剣同志  
が「庶民の勝利」、「ボリシェビズ  
ムの勝利」というすぐれた論文を発  
表、つづいて「五四」運動が起こ  
り、それを境にして中国に新民主主  
義革命運動の大道が切りひらかれた  
のである。中国共産党と毛沢東同志  
の指導のもとに、中国人民はようや  
く帝国主義、封建主義、官僚買弁資  
本主義という三つの大きな山をくつ  
がえし、ついに立ち上がった。社会  
主義改造と社会主義建設を通じ、貧  
しく立ちおくれ、深淵のふちにあっ  
た旧中国ははじめて、初歩的に繁栄  
隆盛した社会主義新中国に生まれ変  
わったのである。

わたしは今年九十歳で、そのうち  
新中国が成立してから三十年、解  
放まえが六十年という勘定になる。  
むかしの中国はまったくこの世の地  
獄で、思いだしたくもないくらいで  
ある。わたしの少年の頃、一九〇四  
——一九〇五年に日本とロシアが中  
国の国土で戦火を交えたが、当時の  
中国共産党は中立政策を宣言して、知  
らぬふりをした。清朝の実権を握っ  
ていた西太后は国土がじゅうりんさ  
れ、人民が虐殺されるがままに任  
せ、北京から二五〇<sup>+</sup>離れた承德の  
避暑山荘に難を避け、贅沢三昧の日  
々を送った。

西太后から蒋介石に至る中国の支  
配者は、いずれも一つ穴のムジナ  
で、外国を恐れ外国にへつらい、国  
家権益を手放す軟弱振りを示しなが  
ら、人民を虫けらのようにあつかっ  
た。外国人は中国国土に租界をも  
ち、治外法権の特権を享受してい  
た。当時、封建軍閥や官僚買弁は帝  
国主義と手を握り、人民の頭上にあ  
ぐらをかき威張りくさっていた。抑  
圧があれば反抗は避けがたく、民衆  
は間断なく反帝・反封建の闘争をす  
すめた。清朝の末期、わたしが中学  
生のころ、わたしの故郷江西省九江  
県で外国人がひとりの中国人を殺す  
事件が起こり、民衆の怒りがかっ  
た。当時の九江県長江紹棠は、こ  
の外国人を処刑したかどにより罷免  
されたばかりでなく、都からやって  
来た勅使によって斬首された。半封  
建・半植民地時代の中国では、高官  
が外国人を恐れ、外国人は民衆を恐  
れたものである。

新中国が成立して三十年、林彪や  
「四人組」の狂気じみた切り崩し  
で、活動面にあれこれの錯誤があっ  
たとはいえ、われわれは共産党と毛  
主席の指導のもとに、なお社会主義  
の工業体制をうち立て、農業生産の  
レベルを引きあげ、文化科学教育事

業を發展させ、人民の生活を改善  
し、保証を与えている。これらすべ  
ては、旧社会では思いもよらぬこと  
であった。

「五四」運動からこれまでに六十  
年がたっている。わたし個人はこの  
六十年間の歴史の証人として、前半  
の三十年と後半の三十年を比べて、  
社会主義の道をすすむことが中国の  
唯一の活路であると考えている。

「五四」運動以後の、中国人民が社  
会主義の道を歩むことをはばむ主張  
や、十数年らい林彪、「四人組」が  
ふりまいたエセ社会主義の極左理論  
は、いま、科学的社会主義の革命の  
奔流によって押し流されてしまっ  
た。

半世紀まえを思い起こすと、多く  
の中国青年がロシアの社会主義革命  
に傾倒していたものだ。わたしは  
「五四」運動で逮捕される前後、北  
京大学の社会主義研究グループの活  
動に参加していた。その後、フラン  
スへ渡って苦学し、同地で周恩来、  
趙世炎、向警予、蔡和森、陳毅ら共  
産主義者の薫陶と影響をうけ、いよ  
いよ深く認識するところがあった。  
即ち資本主義の道はダメで、改良主  
義も前途がない。中国人民は中国共

産党にしたがって社会主義の道を歩  
んでこそ、はじめて人民民主主義を  
保証し、現代科学を振興し、救国救  
民に希望をもつことができる、とい  
うのがそれである。

中国の第一次国内革命戦争（一九  
二四―二七年）の時期、わたしはフ  
ランスから帰国し、黄埔軍官学校で  
政治担当教官を務めた。蒋介石が革  
命を裏切る前後、わたしは中国共産  
党への入党を求めたが、党組織から  
党外にあって仕事をした方が、多く  
の民主人士を結集するのに役立つか  
ら党外に残るよう説得された。

ところが、わたしのような者に対  
してさえ、反動派は迫害の手をゆる  
めなかった。わたしは積極的に抗日  
救国を宣伝したが、そのあげく救国  
救民は有罪であるとして、二回投獄  
され、二度家宅捜査、家屋の破壊と  
いう目にあい、三回も大学教授の職  
を追われた。一九三二年北京大学で  
教えていた折、蒋介石の甥で憲兵連  
隊長の蔣孝先が馬哲民、侯外廬とわ  
たしの三教授をひそかに逮捕した。  
孫中山先生の未亡人宋慶齡や魯迅、  
蔡元培らが「民権保障同盟」の名で  
救援活動をすすめる、国民党反動派も  
共産党や人民大衆が巻きおこした抗

日キャンペーンにおじけつき、わた  
したちを人知れず処刑することをた  
めらい、釈放を余儀なくされた。わ  
たしが出獄するとき、反動派はもっ  
ともらしく一席設けて陳謝したが、  
わたしはテーブルをひっくり返して  
しまった。

一九三七年、日本軍国主義者が中  
国になだれ込んだ。北京が落ちて三  
日目に、日本侵略者はわたしの家を  
搜索した。当時、わたしは天津に難  
避けており、その後、家人ともども  
転々と国民党政府の所在地重慶に至  
り、そこで教育関係と民主運動の仕  
事に従事した。重慶で、わたしの住  
いは日本侵略者の盲爆で破壊され、  
行き所がなくなり、二週間後にやっ  
と一部屋に移り住んだ。その頃の反  
動政府は人民が死のうと生きようと  
問題にできなかった。

国民党反動派は国を売って保身に  
つとめ、汚職を働いて私腹を肥やそ  
うとする連中ばかりだった。蒋介石  
の中国大陸支配の二十二年間、内戦  
は途絶えたことがなく、人民は貧し  
くなるばかりであったのに反し、  
蔣、宋、孔、陳の四大ファミリーは在  
外預金をどんどん増やしていた。蔣  
介石は重慶での七年間、毎年市民か

ら重慶長江道路橋の建設資金を募っ  
ていた。市民は七年間もたて続けに  
献金したが、そのカネはすべて汚職  
官吏の懐を肥やしただけで、なんの  
結果も得られず、川幅数十メートル  
でしかない重慶側南岸には一メートル  
の橋脚さえ築かれなかった。解放  
後、われわれは武漢、南京、重慶な  
どに長江大橋を架橋した。

古都北京の新しい装いも、新旧二  
つの中国の天と地ほどの違いを浮き  
ぼりにしている。抗日戦争が勝利し  
たあと、わたしは重慶から北平（北  
京の旧称）に戻り、再び北京大学教  
授となった。その頃、北京の路地は  
ゴミの山だらけで、高さ三、四メ  
ートルというケースもあった。北京  
の故宮には明代（一三六八―一六四  
四年）のゴミまで積まれていたが、  
解放後やっときれいになった。解放  
まえ、一般の北京市民が食べていた  
のはトウモロコシ粉のマンジュウ  
で、毎年たくさんのお金が街頭で餓  
死したり、凍死したりした。コメや  
メリケン粉はすべて輸入に頼って  
いた。工業の立運れはいっそうひど  
く、普通の日用品も輸入ものばか  
り、一洋油（灯油）、洋火（マッ  
チ）、洋布（機械織りの布地）、